

## 未来の読書を想像する

### ——研究者と電子読書——

趙星銀

発表をはじめる前に、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は2008年から日本に留学して、戦後日本の政治と思想について研究している韓国人です。昨年度に学位課程を修了し、新しい研究生活に一步を踏み出したばかりの未熟な研究者です。

つまり、私は直接的に出版に携わっている出版人ではありません。ただ、人文・社会科学分野の研究者たちは、人文書の生産者群であると同時に、忠誠度の高い消費者でもあります。特に大学院生をはじめとする若い研究者たちは、いわばプロの読者として、読書環境の変化について敏感に反応しており、今回のテーマである電子読書の問題についても、ほぼ出版人たちと同じレベルの関心を持っているといえます。専門分野などによって個人差はありますが、デジタル・アーカイブや電子書籍の活用に関しても、積極的に、そして迅速に受容しているアーリーアダプター (early adopter) の比率も高いと思われます。

特に電子化をめぐる問題は、大学院生をはじめとする若い研究者たちにとっては切実な問題で、実際に活発に議論されている話題でもあります。その話は大きく分けて二つの方向で展開されており、一つは電子化された資料をどのように読んでいるか、もう一つは自分の研究記録をどのように電子化しているかということです。つまり、「読む」と「書く」という、研究においてもっとも基本的な行為において、電子化への対応はもはや選択ではなく必須の問題となりつつあります。

これからは、私自身のケースを一つの例として、実際に研究を進める過程の中で、紙の媒体と電子媒体がどのように使われているかについて説明させていただきます。

このページの左側の赤色の部分は紙の媒体を通じての仕事、右側の青色の部分は電子媒体を通じての仕事を示します。私の場合、主に1950~60年代に書かれた日本の学術論文、新聞、雑誌などの記事を読んでいます。自分が持っている本の場合、このようにテキストの中の知らない人名、事項、意味不明なところに傍線を引きながら本を読みますが、その際、線の種類、ペンの色、あるいは自分なりのマークをつけて情報を区分します。ここのRというマークはリサーチが必要であるという意味で記したものです。特に重要などころには付箋紙をつけますが、ご覧の通り、それをつけすぎると、後でその重要度がわからなくなる場合もあります。そして論文を書きながら、特定の箇所の出典が思い出せないとき、それを速やかに探せないという不便さもあります。

また、単行本に収められていないテキストの場合、あるいは初出の時と単行本化する時の間に修正が加えられた場合も少なくないため、重要な資料はその初出雑誌をチェックする仕事を要します。その時は大体、図書館に行って所蔵雑誌を参照し、必要な資料をコピーして

読みますが、ただその複写資料がだんだん増えると、それを体系的に整理することも大変なことです。私の周りにはそれらを一定の基準にそって製本して本にする人と、複写資料をそのままスキャンして電子化する人が分かれています。まだ前者の方が圧倒的に多いですが、だんだん後者のやり方も説得力を増している状況です。電子化した後、それをネット上のクラウドに保存しておく、資料の整理がしやすくなるのみならず、いつでもどこにいても簡単に資料にアクセスできるという大きなメリットがあるからです。

また、資料によっては、劣化しているため、複写が禁止されている場合も少なくありません。これは、1955年、日本共産党の路線変更が決定された第6回全国協議会（六全協）の議決決定集の写真です。またこの資料は、岩波書店の雑誌『思想』の1956年11月号で、これには1950年代半ば、いわゆる「大衆社会論争」を呼び起こすきっかけとなった重要な特集が掲載されています。二つとも、私の研究にとって大変重要なものですが、複写禁止の資料です。そういう時、図書館の許可を得て、該当箇所をカメラで撮影することが許される場合があります。そうすると、元の資料を傷つけずに、簡単に必要な資料を自分のものにすることができます。しかしこのように電子化した資料を、そのままモニター上で読むことにはまだ慣れていないため、私は通常、これらをプリントしてまた紙の媒体に戻して読んでいます。

逆に、デジタル機器の上で直接読むのがむしろ簡単な場合もあります。私は現在、KindleとiPad、スマートフォンを使ってもものを読んでいます。Kindleの場合、日本国内では入手し難い洋書も簡単に読めるというメリットがあります。この資料は、Ernst Toller というドイツの劇作家が20世紀初頭に書いた作品ですが、1960年の日本の哲学者が書いた文章にこの戯曲についての言及があったので調べた結果、それを紙の本で入手することは極めて困難でした。しかしamazonでは、1-clickでこの資料の英訳版を簡単にダウンロードすることができました。

さらに、私は韓国人ですから、たまには母国語で書かれたものも読みたくなります。韓国のネット書店から本を注文して海外配送を通じて受け取った場合もありましたが、特に本は重いので、高い郵送料がかかります。しかし電子書籍の場合、海外配送にかかる時間と費用が節約でき、また大量に本を買っても物理的に場所をとらないため、私のような留学生には大変魅力的なものであることを実感しました。この画面は私のiPadに入っている韓国語の電子書籍の目録、そして、韓洪九先生の『大韓民国史』の電子版の本文です。

そのほかにも、iPadの場合、優れたディスプレイ機能を持っているので、カラーのもの、たとえば雑誌を読むのも快適です。いつ、どこにいても合間の時間にロードして読むことができるというのも電子媒体の長所です。

しかし研究者の場合、単に頭と目だけでもものを読むことに満足することはできません。娯楽のための読書は論外として、研究のために読書する時には、どうしても手を使って傍線を引いたり、メモをしたりしたくなります。電子媒体の資料を読むときも、鉛筆と紙を使って調べリストを作ったり、読書ノートを作ったりして、そこからまた資料を調べる過程を繰り返しながら研究を進めていくのが普通です。そのように調べた結果をまた、ワープロで入力

し、クラウドなどに保存しておきます。そしてその研究記録をもとにして、手書きで草稿を書き、最終的にまたワープロで論文を作成して成果物を作り上げます。

このように、通常の研究は紙の媒体と電子媒体を往復する形で行われますが、もしここで、電子化されている資料を使って、この中間段階を飛ばして、直接電子ノートを作成することができるとしたら、どのような変化がもたらされるでしょうか。電子読書ツール **WuWei** を使って、それを実験的に試してみました。

対象となるテキストは、戦後日本の思想家、藤田省三が 1978 年に発表した文章「松陰の精神的意味に関する一考察」です。このテキストは岩波書店のアンソロジー「日本思想大系」の吉田松陰の巻への収録著作を選定することになった藤田が、なぜこのような著作を選んだかを解説したものです。

ご存知の通り、吉田松陰は日本の幕末期の思想家・教育者で、通常、天皇に対する猛烈な忠誠心と愛国心、尊皇攘夷論で名を知られる人物です。韓国語版の **wikipedia** には、「近現代的意味での日本右翼思想の創始者」と書かれています。しかし著者の藤田は、「天皇制国家の支配原理」という論文で、天皇制を中心に建設された明治国家が日本の近代を未完に終わらせた点を厳しく批判した、左派的な思想史家です。その藤田は、松陰という人物をどのように描いたのでしょうか。

結論を先に言いますと、藤田は、松陰の意義を「尊皇攘夷論」のような「思想」からではなく、混沌とした幕末史の真ん中で、挑戦と失敗を繰り返しながら、来たるべき明治時代を切り開いた彼の「精神」から見出します。藤田にとって重要なのは、松陰の生涯そのものが、幕末という、崩壊していく時代の本質をそのまま体現していた点です。

ここからはこのテキストを、「状況」、「精神」、そして「原始・原初」という三つのキーワードを中心に、**WuWei** を使って整理しながら読んだ結果を皆様にご紹介します。

まず、第一のキーワードは「状況」です。藤田のいう「状況」あるいは「状況化」とは、到底動かせないように見えた強固な「現実」が流動化することを意味します。実際の本文では、「総ての「制度的なもの」、「型」を備えたもの、「恒数的なもの」が崩壊し去った社会状態を意味」とし、それは予測可能な秩序的な関係ではなく「変数」たちの衝突と結合が社会の動向となっていくことを意味すると書いています。

つまり藤田は、この「状況化」こそが幕末史の本質であると考えます。政治的には統治の縮小、思想的には諸学派における論理性の喪失、社会的には身分制度の崩壊がその特徴を語ってくれます。こうして既成のものが崩れていく「崩壊」の歴史を描くのは、この松陰論を含む単行本『精神的考察』全体の大きなテーマです。そのような崩壊史への関心は、彼が 1960 年代に熟読したエドワード・ギボン (Edward Gibbon) の『ローマ帝国衰亡史 (*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*)』からの影響ではないかと推測されます。またこの本は藤田の 60 年代の論文「異端論断章」にも大きな影響を与えており、後ほど出てくる「精神」という言葉とも関連しています。

再び「状況」のキーワードに戻ると、このような混沌とした状況は社会にとって危機となるわけですが、しかし藤田にとってそれは決して否定的な意味ではありません。そのような

混沌、カオスの中から既成の現実の融解が行われ、新しい現実を作り出すことのできる可能性が出てくるからです。藤田の場合、「奇兵隊」などの「横断的結社」がその中から出現した点をその例として挙げています。ここからはまた「奇兵隊」をはじめとする「横断的結社」の意味を強調した1964年の藤田の著作「維新の精神」との関連性、そしてその中に登場する松陰についての言及を連想することができます。そこで彼は松陰の認識行為について「兵学的思考に根差した」もの、つまり「真摯な戦闘者」が「卓越した敵」を発見した時、彼に対決しながらも相互をリアルに認識しようとする努力を発揮するとし、高く評価しています。そのような認識に関する兵学的態度の強調、そして維新の「思想」ではなくて維新の「精神」を強調した点は、松陰論の二番目のキーワードである「精神」につながります。

この二番目のキーワードの「精神」について、藤田はほかの文章の中で、「世界に応答するもの」、あるいは「普遍的なもの」、「高低のあるもの」と定義しています。いずれも抽象的な表現ではありますが、それはつまり、世界観や哲学の内容よりも、その内容を生み出した人間の態度を指しているのではないかと思われます。彼における「精神」という言葉の強調には、研究者の飯田泰三氏の指摘の通りに、当時「既成品的な思想」と思想史がブームになって流行っていた日本の言説空間に対する拒否感が大きく働いていたと言えるでしょう。また、完成した作品としてのエリートや権力者の「思想」ではなく、民衆の複雑な、まだ解決されていないものとしての底流の「精神」に注目して『明治精神史』を著述した歴史家、色川大吉との共通点と違いについても考えてみるすることができます。あるいは、フロイトの精神分析学からの影響、そして藤田のいう「精神」を英語にすると、それは「mind, spirit, will, psychology...」のどの概念に近いかという素朴な問いを立ててみることに考えが進み、ここからは先ほど触れたギボンの「mind」の使用法との類似点を見出すこともできます。また、藤田の強調する、世界に対決するといった態度からは、到底逆らうことのできない運命（fortuna）に立ち向かって、人間としての全能力をかけて挑戦する、勇猛な人間の勢いを評価したマキャベリの「virtù」という概念とのつながりにも考えが進みます。これはまた「敵」の存在構造を徹底的に理解し尽くすことで、その対象の終末をもたらそうとする認識態度を、マルクスのヘーゲル読解から発見したシュミットの言及や、さらにシュミットを介して丸山眞男との関連性にまで拡散していくことができます。

再び「精神」のキーワードに戻りますと、今度は彼が一貫して強調した「戦後精神」という概念に触れる必要があります。彼のいう「戦後精神」とは、制度の以前、あるいはその外において、制度を作り出そうとする人間の能力と態度を指します。またそのような精神はこの松陰論の最後のキーワードである「原始・原初」とも深く関連しています。

藤田は1945年8月15日の日本に、「自然状態」が到来したと理解します。近代政治哲学の主要概念の一つである「自然状態」とは、簡単にいうと政治共同体が出現する以前の人間社会の状態を指す言葉ですが、ここにはwikipediaの「state of nature」項目のリンクを添付しました。「自然状態」を戦争状態と理解したホブズとは違って、藤田の特色はそれが「不思議な明るさ」を持っていると評価した点にあります。実はほぼ同じ世代の政治学者、永井陽之助も、1945年8月15日を日本における「自然状態」と規定したことがありますが、彼はそれを政治共同体における深刻な危機として受け止めました。それとは逆に、藤田の明

るい「自然状態」理解は、先ほど触れた「状況化」の中の、「カオスの中からの可能性」というものと深く関連していると言えるでしょう。

さらに「原始・原初」的なものへの評価は、1960年、藤田が主張した「原人的な市民」論を連想させ、そこから60年安保という戦後日本の大きな歴史的事件や、それに関する様々なアーカイブと資料、そしてその時に政治的に重要な言葉として登場した「市民」という語彙にも連想が進みます。詳しくは触れませんが、一点だけ申しますと、藤田の市民論の形成にとって重要なきっかけとなった1960年5月19日、その日に行われた日米安保条約の強行採決とそれへの反対運動と、ちょうどその一ヶ月前の4月19日、韓国で行われた民主化抗争である「4・19革命」との関係です。つまり1960年の春、東アジアの隣接した地域で民主主義の名のもとで大々的な政治運動が起こり、またその中で「市民」という語彙が日韓両国の運動の中に登場したということは、戦後史を専門にしている私としては非常に興味深い事実です。

ここからはもちろん、多様な政治学者や思想家、そして彼らがともに問題視した「大衆」と「市民」の関係、さらには1950年代の大衆社会論争とそれをめぐるスターリン批判、ハンガリー事件など、あい連なる連想が続きます。このような思考の拡散にはキリがないので、ここで本来のキーワードに戻り、松陰論をまとめることにします。

つまり、「原始・原初」、「精神」、「状況」というキーワードを中心に藤田が描いた松陰像は、まず「思想家」ではない人、状況化する時代の体現者、そして時代の運命に対して律儀に悪戦苦闘を繰り返した人ということになります。そしてこのように、松陰の「思想」は重要ではないという点にむしろ彼の思想史的意味があるのであり、だからこそ、その「日本思想大系」の松陰の巻には、彼の書簡や記録文、詩文を収録するべきであると主張しているわけです。つまり、思惟する人間としてではなく、時代と世界に対して反応する人間としての松陰を描き、また状況化する時代の中で噴出してくるリアリズムとロマンティズムの傾向を、その松陰を通じて捉えようとしたのです。結論的には、このような選定を通じて、尊皇攘夷論者という既存の松陰像に対して、カウンター・バランスを取ろうとしたのが、このテキストの目的であると言えます。

以上の読書記録の全体像をWuWei上で眺望すると、このようなものになります。松陰から「4・19革命」まで、たまには論理的な飛躍を含みながら拡散的に読解をしてきたわけですが、ここからも思考は限りなく広がっていきます。松陰を通じては明治維新と志士たち、あるいは彼の儒学理解の方面へ、「大衆」論を通じては大衆文化と大衆政治の方面へ、「4・19革命」からはその後の韓国の現代史の方面へ……。このような作業を積み重ねていくと、今日お話ししたところは、無限な知的世界のごく一部分にすぎないということが、視覚的にもうまく伝わっていると思います。

この無限性は、WuWeiというツールの持つ大きな特長であり、可能性です。ページが無限であっても、検索機能を使えば、ほしい情報にすぐアクセスすることができますし、またこのように作ったページに名前を付けて、他の人に伝達、共有することもできます。こうして自分の頭の中をマインドマップ (mind-map) にして描きながら、それを研究者や読者の

個人的なアーカイブとして活用することができる点、パーソナルな百科事典を作り上げることができる点を、WuWeiの第一の特長として挙げたいと思います。第二には、連想検索の機能を使って、その知的世界をより深く、より豊富にすることができるという点です。第三には、共同読書がより楽しくなるという点です。たとえば、同じテキストを読むゼミの仲間たちと、各自のWuWei記録を比べてみると、お互いの共通点と違いが明瞭に可視化できて、より楽しく生産的な議論につながるのではないのでしょうか。

ここまで、WuWeiの開発にも関わっている立場から、宣伝を兼ねてそのメリットを強調して説明してきましたが、しかし無論、それに欠点がないわけではありません。なによりも、「無為自然」の「無為(WuWei)」を標榜するツールにしては、まだまだ(使用者の)多くの「作為」が要求されている点が大きな欠点です。この点は、筆記認識や音声認識の技術、電子図書館との連携を通じて豊富な良質のコンテンツの確保、あるいはハードウェア的に、読書ノート専用端末の開発など、長期的な展望を踏まえて考える必要があるでしょう。紙の媒体の読書と手書きの便利さを追求しながら、それを電子媒体の活用性と結合していく方向に、未来の読書像が描けると思います。

このツールの開発者である三分一信之さんとの対話の中で、技術的に不可能なことはほとんどないということを言われましたが、それは逆に、使用者のニーズ、著作権などの法的な問題、そして読者の倫理意識との調和が非常に難しく、重要であるという話にもなるでしょう。しかし、たとえば、筆記を認識して自動的に活字体に変換してくれる電子ノートにWuWeiを装着し、また電子書籍のコンテンツに傍線を引くと、その箇所が自動的にノートに引用され、同時に書誌情報を脚注に貼り付けてくれるような、最強の読書ノートを想像してみることは、まだ不可能であるとはいえ、読書人として非常に楽しいことです。読書の中における想像力の発揮のみならず、読書という行為そのものについても多様な想像力が要求されている現在は、それこそカオスの中からの可能性を発見することのできる時点ではないのでしょうか。

報告は以上です。ご静聴ありがとうございました。

#### 趙星銀 (Cho Sung-eun)

1983年生まれ。延世大学校政治外交学科卒業、東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。日本学術振興会外国人特別研究員PD。専門は戦後日本の政治思想。論文に「「高度成長」反対——藤田省三と「一九六〇年」以後の時代——」『思想』第1054号(岩波書店)など。訳書に藤田省三『精神史的考察』(韓国語版、トルベゲ、2013年)。